
PPO核ZERO講座 第1回



8月6日ヒロシマ 被爆の実相



2011年1月23日

岡山県労働者学習協会 長久啓太

ブログ「勉客商売」

本日のポイント

- ◇なぜ被爆の実相を学ぶのか、その意味と視点
- ◇原爆という兵器はどんな兵器か
 - ーヒロシマ・被爆の実相から
- ◇原爆は、人間にどのような「死」「生」を強いたか。

なぜ被爆の実相を学ぶのか

- ①核兵器廃絶の願いと運動の「起点」
- ②日本でも世界でも、草の根の運動と「被爆の実相普及」が今後ますます重要に。

被爆の実相を学び伝える視点

①「何万人が死んだ」「何千度の熱線が」など、原爆の恐ろしさを、“数字”だけで語ることしかできなければ、核兵器との本当の対決にならない。核兵器の特徴のひとつは、その「無差別性」（個を消す）にある。

②そこにいた1人ひとりが、どんな死や生を強いられたか。そこにどんな痛みや怨念（おんねん）や苦しみが生まれたのか。1人ひとりの人間に何が起きたのか。「個人」の痛みを知り、それを浮き彫りにしてこそ、核兵器の本質にせまれる。そうしてこそ、被爆者に強いられた原爆の残虐性・非人道性の共通性も見えてくる。

実相を知る方法として

被爆者の**手記・語り・原爆の絵。**

その「重さ」について（資料：証言集もみながら）

◇被爆者の多くは「**忘れられるものなら忘れたい**」と思っている
* 頭からこびりついて離れない「あの日」の惨状と自分の体験

◇手記を書いたり、若い人の前で証言をしたり、原爆の絵をかいたりすることは、「あの日」の惨状、自分の体験・感情を思い出すこと。

* 思い出すだけで、**相当な精神的・肉体的苦痛をともなう**

◇では、なぜ、あえて「伝えよう」とをするのか…

* **核廃絶・平和への希求**。「伝え残したい」という強い気持ち。

① 1人ひとりの人間の上に、原爆が落ちてきた

◇1945年8月6日8時15分

* 街の中心部をねらって

・「相生橋」が目標地点

* 広島の当時の推計人口

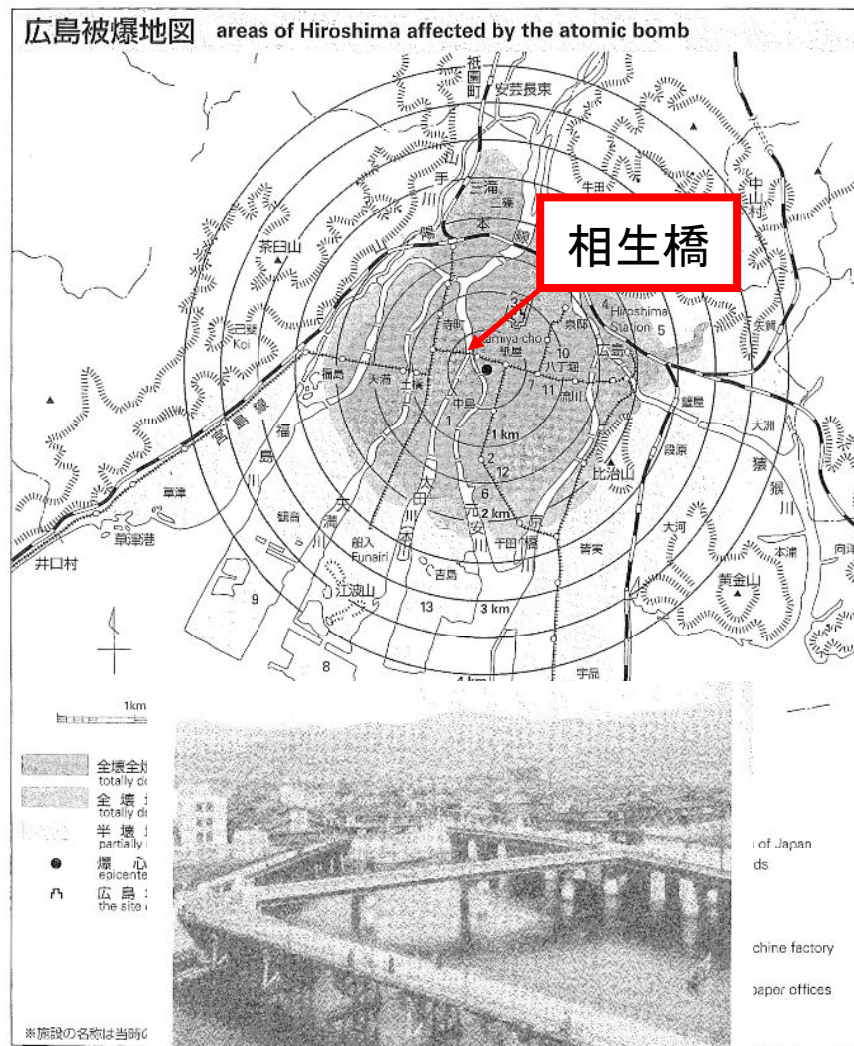
・34万～35万



B29 エノラ・ゲイ



リトルボーイ



原爆投下の目標になった相生橋 (広島市公文書館提供)

どういふ人たちの上に落とされたのか。

- ◇「当日死者」の65%は、**子ども・女性・お年寄り**という**非戦闘員**
* 10歳未満の子ども18%、60歳以上のお年寄り8%、女性(10～59歳)39%



CGで復元した中島地区の街並み(現在の平和記念公園)。手前は広島県産業奨励館(現在の原爆ドーム)＝平和公園復元映像製作委員会提供



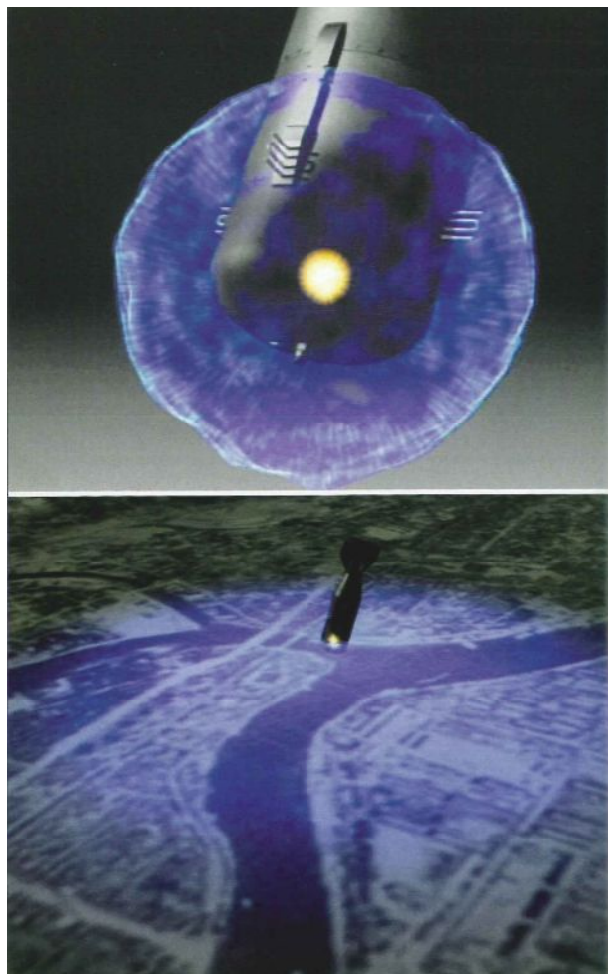
爆心直下（猿楽町） の子どもたち



猿楽町の子供たち。右から2人目が笠井恒男さん（同氏提供）

②原爆投下ーそこで何が起きたのか

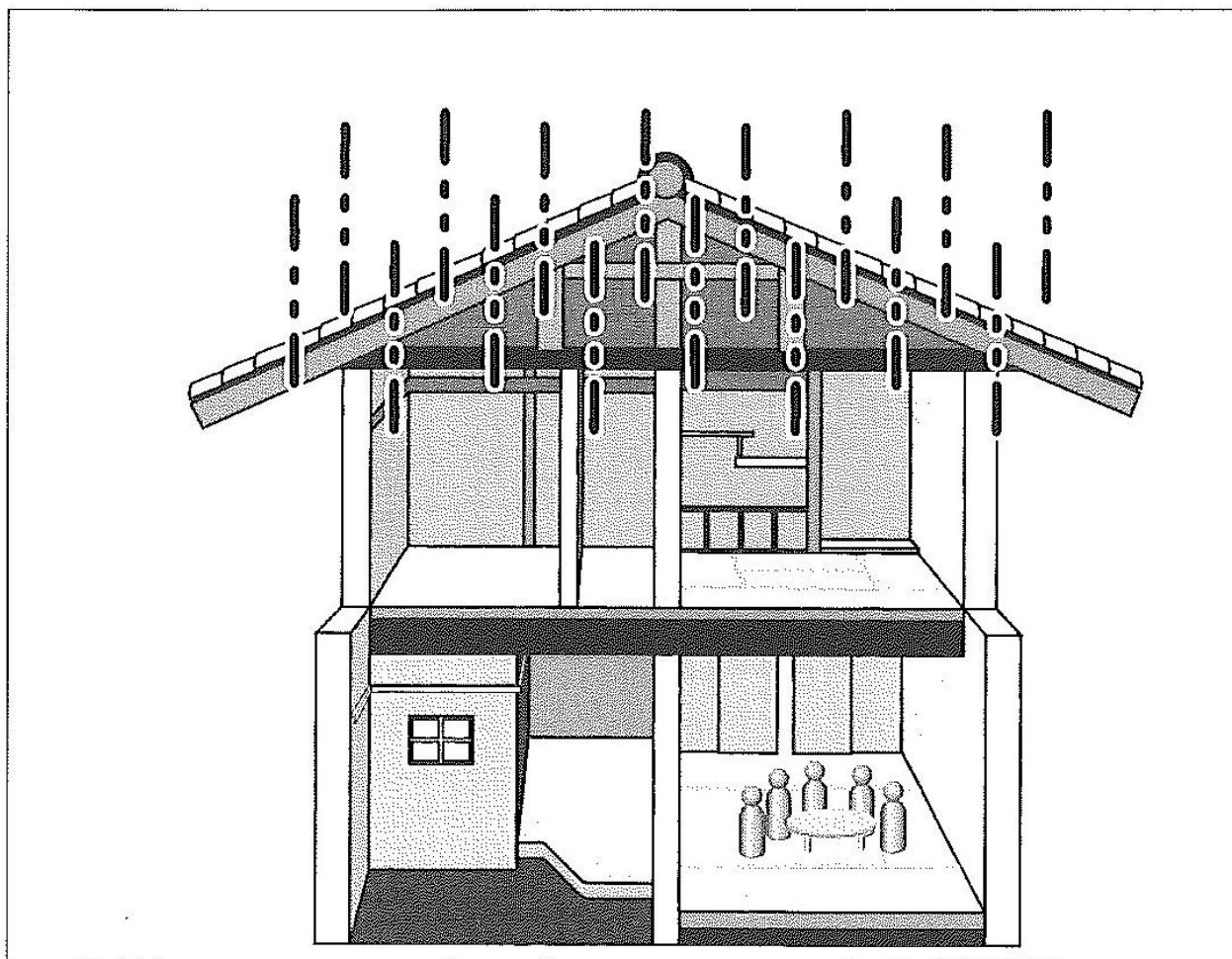
(1) 100万分の1秒ー死の放射線(原爆炸裂前)



猛烈な核分裂反応により、原子爆弾をつきぬけて、爆心地一帯に、中性子線の矢がささった。初期放射線(原爆が爆発して1分以内に放出された放射線のこと)は、あらゆる物質を通り抜け、地上に達し、あらゆるものを突き刺した。

「爆心地にいた人々は、100万分の1秒に発せられる最初の中性子から、それを避けることなく浴びました。そこにいた人は、いわゆる爆風とか熱戦とか閃光がなかったとしても、全員が亡くなっていたであろうと推定されるわけです。誰1人避けることはできなかったのです」

(『原爆投下・10秒の衝撃』NHK出版より、広島電機大学葉佐井博士の話)



日本家屋は中性子を半分程度通すとされる。2階建て家屋の1階にいた島本さん一家は約8グレイの中性子を浴びたほか、中性子の反応により発生したガンマ線49.7グレイを浴びた

木造家屋にも放射線は貫通。
人びとは**死の放射線**をあびた。



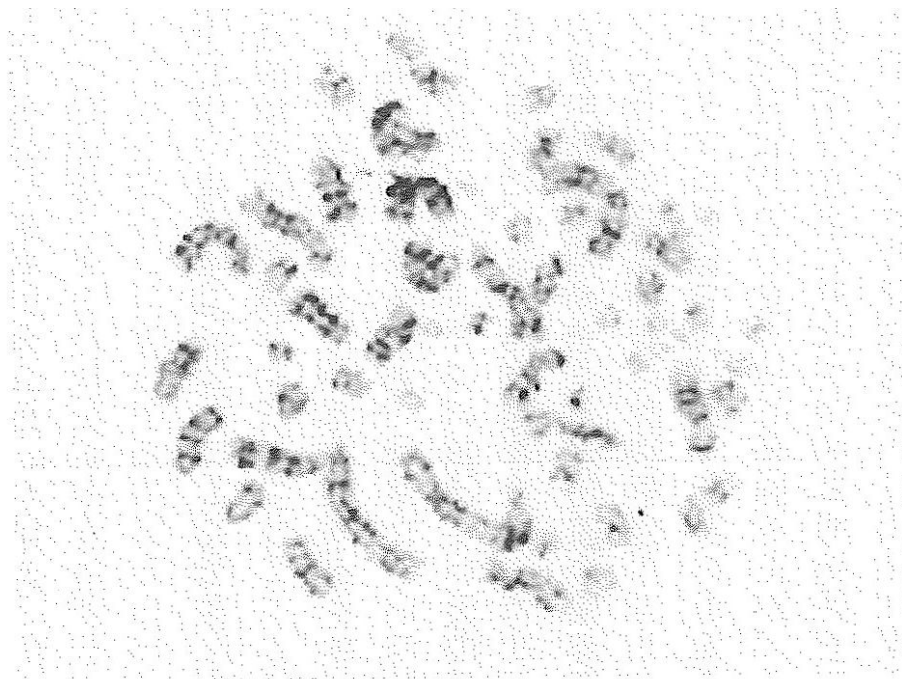
『朽ちていった命 - 被曝治療83日間の記録』(新潮文庫)

1999年9月に起きた茨城県東海村の臨界事故。

作業中に被爆した大内久さんの83日間にわたる壮絶な闘病記録。



事故発生時の作業状況。大内氏はウラン溶液を注ぐロウトを支えていた。溶液を注いでいた藤原理人氏も大量の中性子線を浴びた



染色体の顕微鏡写真（腸骨の骨髄細胞）。ばらばらに破壊され、同定できない。
採取日：1999年10月3日（被曝4日目）

「生命」を根底から破壊する兵器



〈右手〉東大病院転院時には、赤く腫れているだけだった。
撮影：1999年10月7日（被曝8日目）



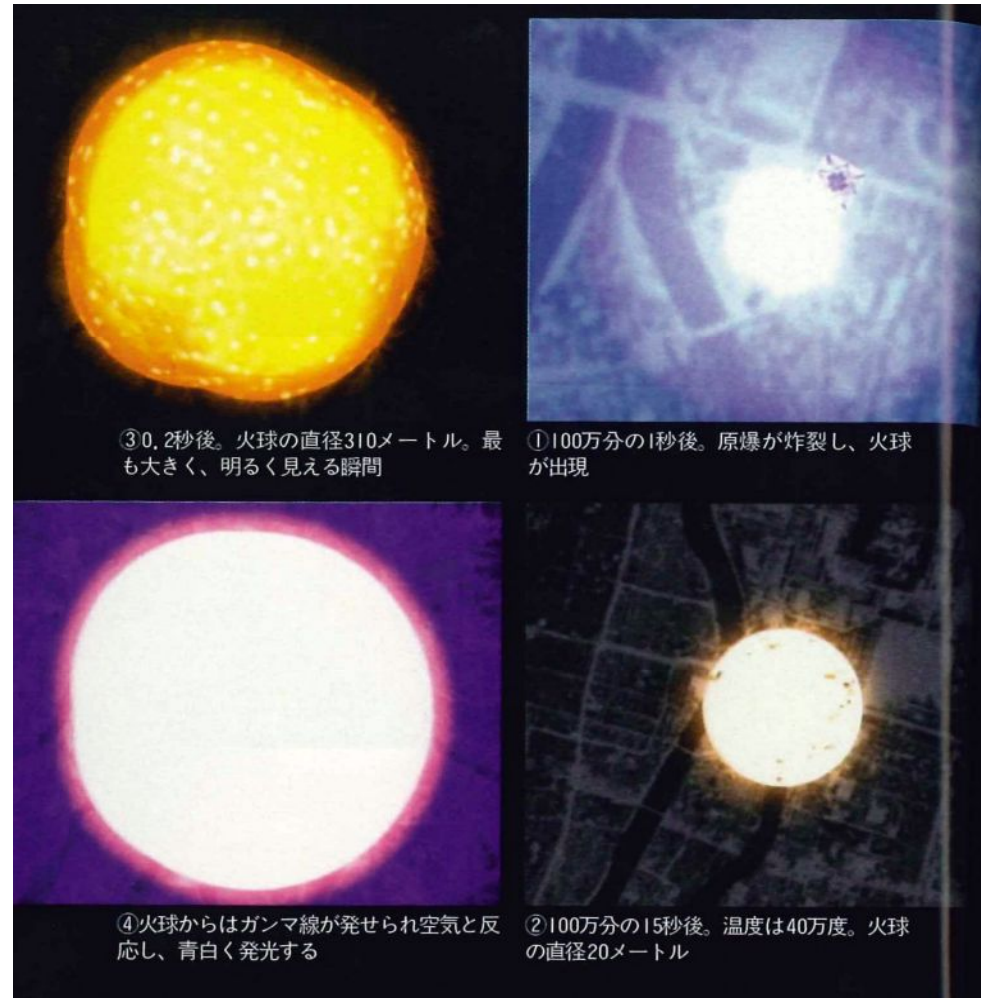
〈同右手〉表皮が失われ、赤黒く変色している。
撮影：1999年10月25日（被曝26日目）

(2) 火球と熱線 (100万分の1 ~ 3秒)

火球の出現

0. 2秒後、火球は直径310メートルに膨張。最も大きく、明るく見える瞬間。

この時間から、2秒までの間に熱線の90%が放出される。大量のガンマ線が放出され、空気と反応して紫色に見える。



100万分の1秒までに爆弾内部の温度は250万度。原爆が炸裂、火球出現。

100万分の15秒、温度は40万度。太陽の70倍近い高温。火球の直径は2メートル。



「一瞬、目も眩むような閃光、あつと思った瞬間、思わず左後方上空を見た私の目に、黄色とも、橙色ともいえない**火の玉を見た**。左の顔面に熱い！と手をやったとき、暖かい風に吹きあげられ、身体が浮き上がって、右前方に走るようにのけぞり倒れた。その距離は5、6メートルはあるだろう。そこまでは覚えていた」

（高野眞さん、当時27歳－爆心地から南東へ2キロ、比治山）

←絵と証言は同一人物ではありません。

原爆炸裂の瞬間。

（匿名希望）

熱線によるやけど

熱線は地上に突き刺さり、瞬時にあらゆるものを焼いた(溶かした)。

爆心地に近い人ほど、この熱線による火傷の被害が甚大だった。

爆心直下の場合、その温度は1千数百度～2千度以上になったと予想される。広島の場合、爆心地から3.5キロまで「閃光やけど」の被害が出た。



東練兵場は一面火の海。
死体が散乱し、まだ息のある人が逃げ回っている。
今もあのとときのうめき声聞こえてくる気がする。

——森永ヨシエ

熱線による火傷の証言(別紙資料)

(3) 衝撃波と爆風（～10秒）

◇衝撃波(空気の圧力の強弱が伝わる波)

* 火球の表面の膨張で大気圧が極めて急激に大きくなり、この空気の高圧になった部分が火球から離れて音速を超えるスピードで広がる。

* 爆心地から1キロの地点の1㎡の面積が衝撃波から瞬間的に受ける圧力は10t前後に及び、鉄筋コンクリート以外の建物は完全に破壊された。

◇爆風の広がり

* 衝撃波の高い圧力部分とその前面の大気圧との大きな圧力差によって、空気の移動である強烈な爆風が発生する。

* 爆風は中心部から広がった。爆発の3秒後に1.5キロ、7.2秒後に3キロ、**10.1秒後に4キロの地点に到達したと予測される。**

* 木片やガラス片が人々に凶器として突き刺さった。



一面閃光に包まれ、土を巻き上げながら爆風が迫ってきた。
広島二中の2階建校舎3棟が同時に崩壊した。

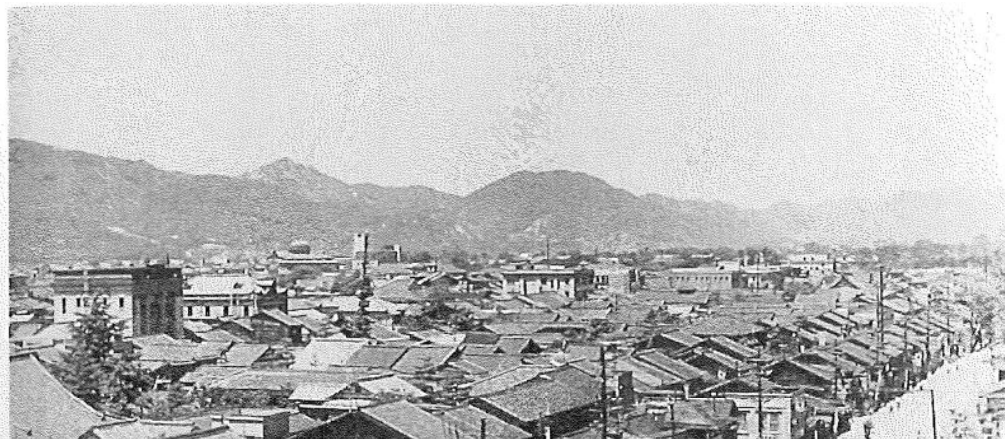
—和田耕治



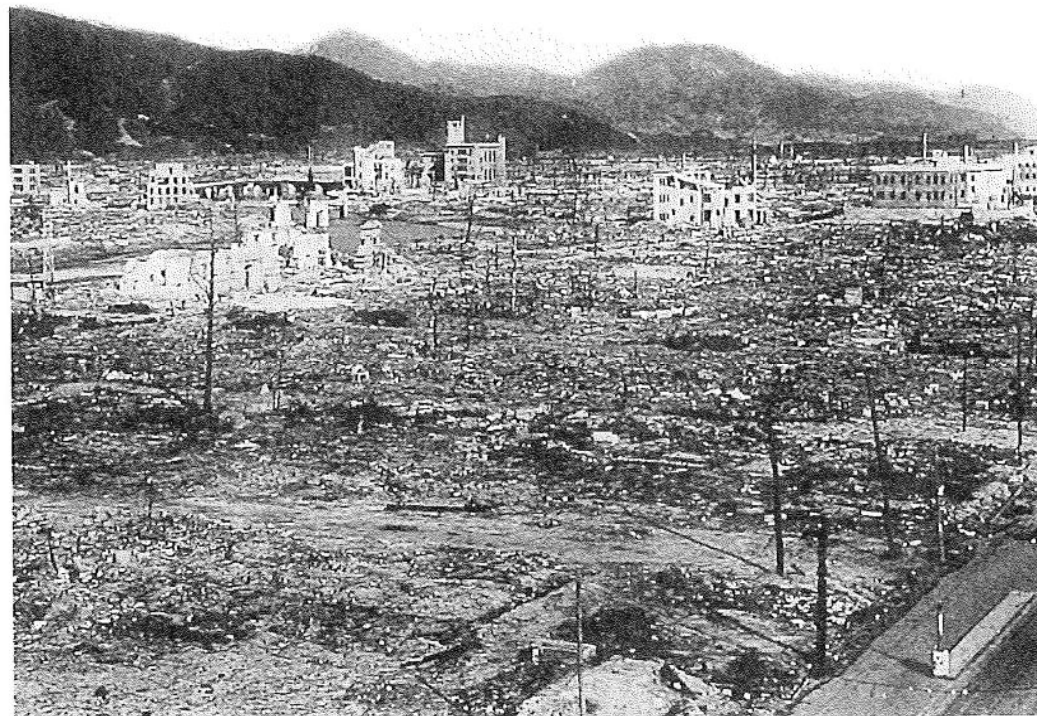
閃光に続く爆風。
—松原美代子

* この爆風によって、木造建物の多くは倒壊し、人びとは倒壊した建物に閉じ込められ、さらに熱線で生じた火事によって焼き殺された。**「当日死者」の48%が、「建物内(下)での圧焼死」という事実。**
(他、爆風によって地面などにたたきつけられた→36%、熱線で焼かれた→10%)

* 無数に起きたこの現象が、「建物の下敷きになった人を助けられなかった(見捨てた)」という、被爆者の「心の傷」として深く刻まれる結果となる。



被爆
島市:



被爆後、同地点から市街を望む (岸本吉太撮影、広島平和記念資料館提供)



炎

(4) 火事嵐

◇爆発後20分すぎると、強風にあおられて、広島市内は火の海に。中心部は熱による上昇気流。風速10数メートルにおよぶ強風。

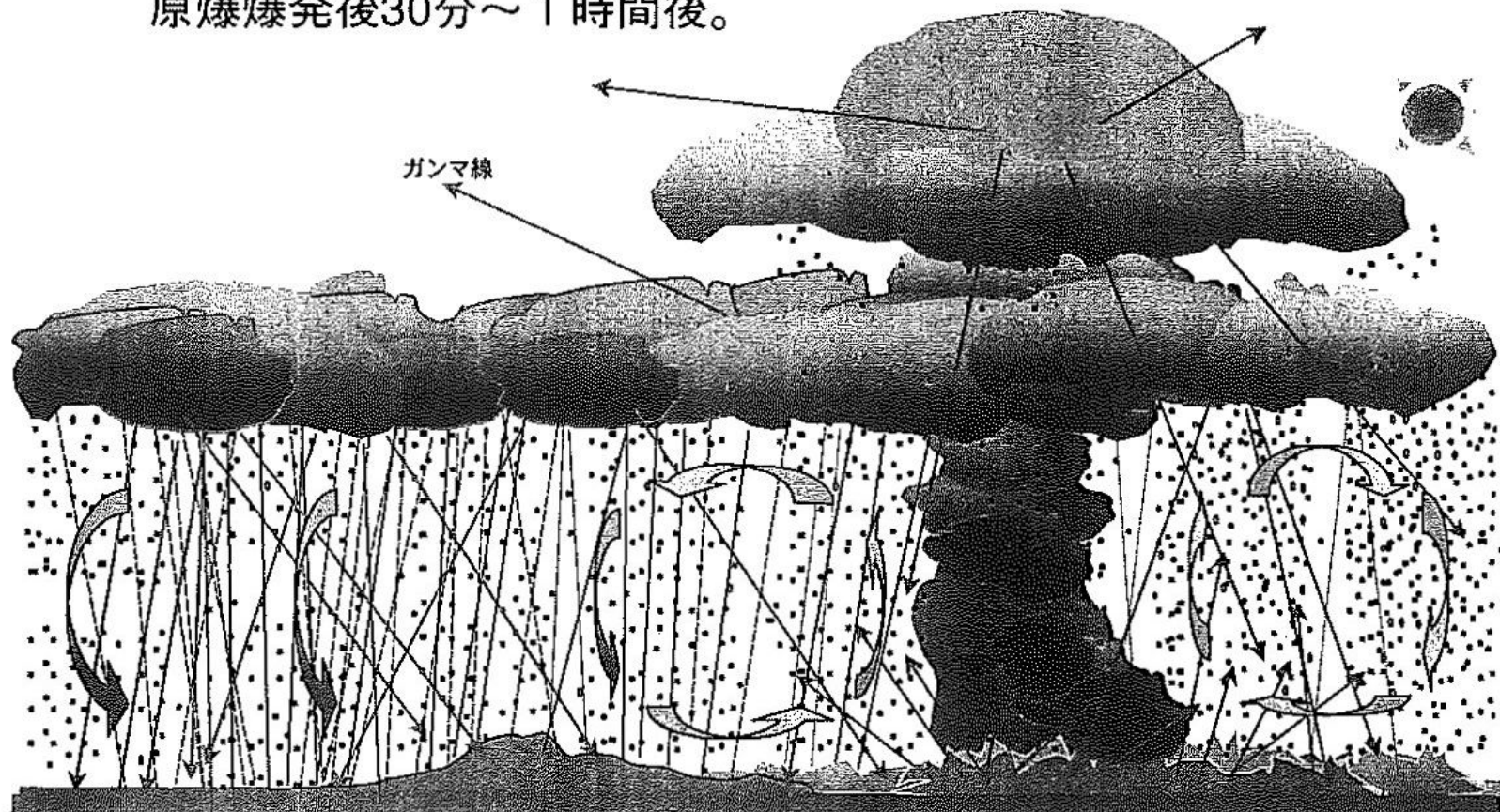


原爆投下1時間後の相生橋。
あのとき目にした炎の色はとても描ききれない。

——高原良雄

(5) 「黒い雨」「黒いすす」などの放射性降下物

原爆爆発後30分～1時間後。

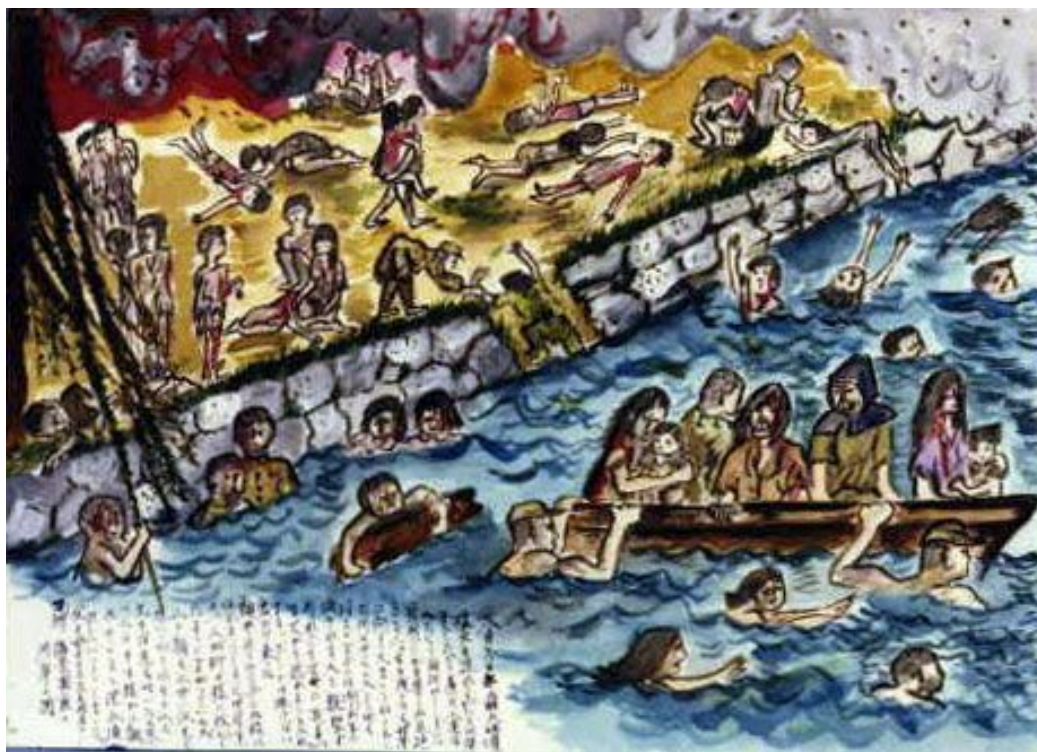


黒い雨（黒い線）、黒いすす（点）、目に見えない放射性微粒子が広い範囲に放射性降下物となって降下した。黒いすすと微粒子は風下に流れていった。誘導放射線も強い放射線を出しつづけた。

入市被曝・内部被曝の脅威

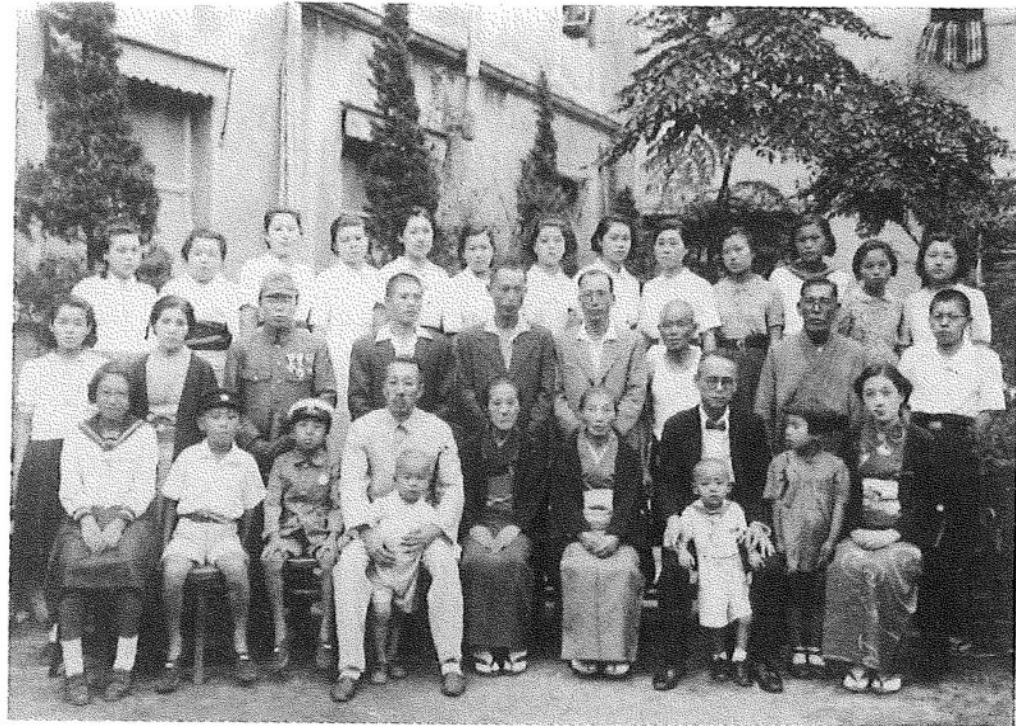
③爆心地の人たちの「死」について

被爆者の証言から（別紙資料）



◇いつも患者でいっぱい
이었다

* 1933年に開設。400
坪の敷地にレンガ造り
2階建て、中庭を抱え
てコの字形に約50の
病室があった。低料金
で評判もよく、いつも患
者でいっぱい이었다。



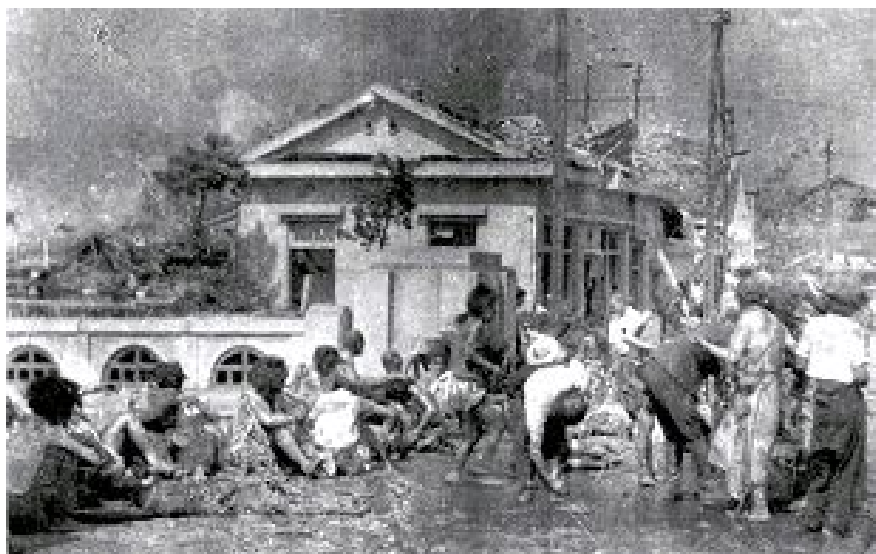
島病院中庭。島薫院長と親族、病院関係者が集まった
=1943年8月（島一秀氏提供）

* 8月6日、院長の島薫さんは、市外に出張手術に来ていて、偶然助かる。「広島が全滅」の連絡をうけ、同行の看護婦とともに夜、広島市内に入る。島さんが病院の姿を目のあたりにするのは、7日午後。「あんなに堅固であると思っていた私の病院が紙のように破壊つくされた」(遺稿集)。



* 80人余りの職員、患者は全員が即死。島さんは廃墟のなかからわずかに見えそうな救急資材を手に、**被災者の救護活動に夜を徹して取り組む**。多くの負傷者が訪れた。みんな裸身だった。疲れ果て、負傷者の間に身を横たえ、眠る間もなく耳に入ったのは、助けを求める少女の声だった。川を隔てた方角から聞える悲痛な叫びに眠りを中断されながら、島さんが目覚めたのは8日午前5時頃。**手当ての甲斐なく、負傷者の多くは亡くなった**。島さんは「数週間前には呉が、そして今度は私の町広島が！私の眼には涙が一杯たまった。『戦争とはこんなものか』と自問した」と回想している。
(以上は、『社史が語る 原爆・ヒロシマ』新日本出版社、2003年より)

* 当日撮られた写真は、中国軍管区司令部 に報道班員として詰めていた松重美人さん(中国新聞カメラマン)による5枚しかない。



御幸橋付近、警官派出所前

あの日の爆心地の惨状は、被爆者の証言と、「原爆の絵」によって想像するしかない。

「御幸橋西詰(爆心地から約2.2キロメートル御幸橋付近、警官派出所前)の惨状は言葉にできません。動かない母親の体にすがりつく幼子、生後間もない赤ん坊を両手に抱きかかえ半狂乱で叫ぶ母親…。アスファルトにべったりと横たわる被災者の目が私を見つめているようで、シャッターを切るのに気後れがしました。20分くらいためらい、**やっとの思いでシャッター切った**のです。その勢いで少し近づき、もう一度シャッターを切った。ファインダーは涙でうるんでいました。『顔がわかる写真を』と前に回りこんだが、どうしてもシャッターが切れませんでした」(『社史が語る 原爆・ヒロシマ』、新日本出版社)

* 松井さんは、さらに爆心地に向かうが、あまりの惨状にシャッターをきることができなかった…。

建物疎開学童の悲劇

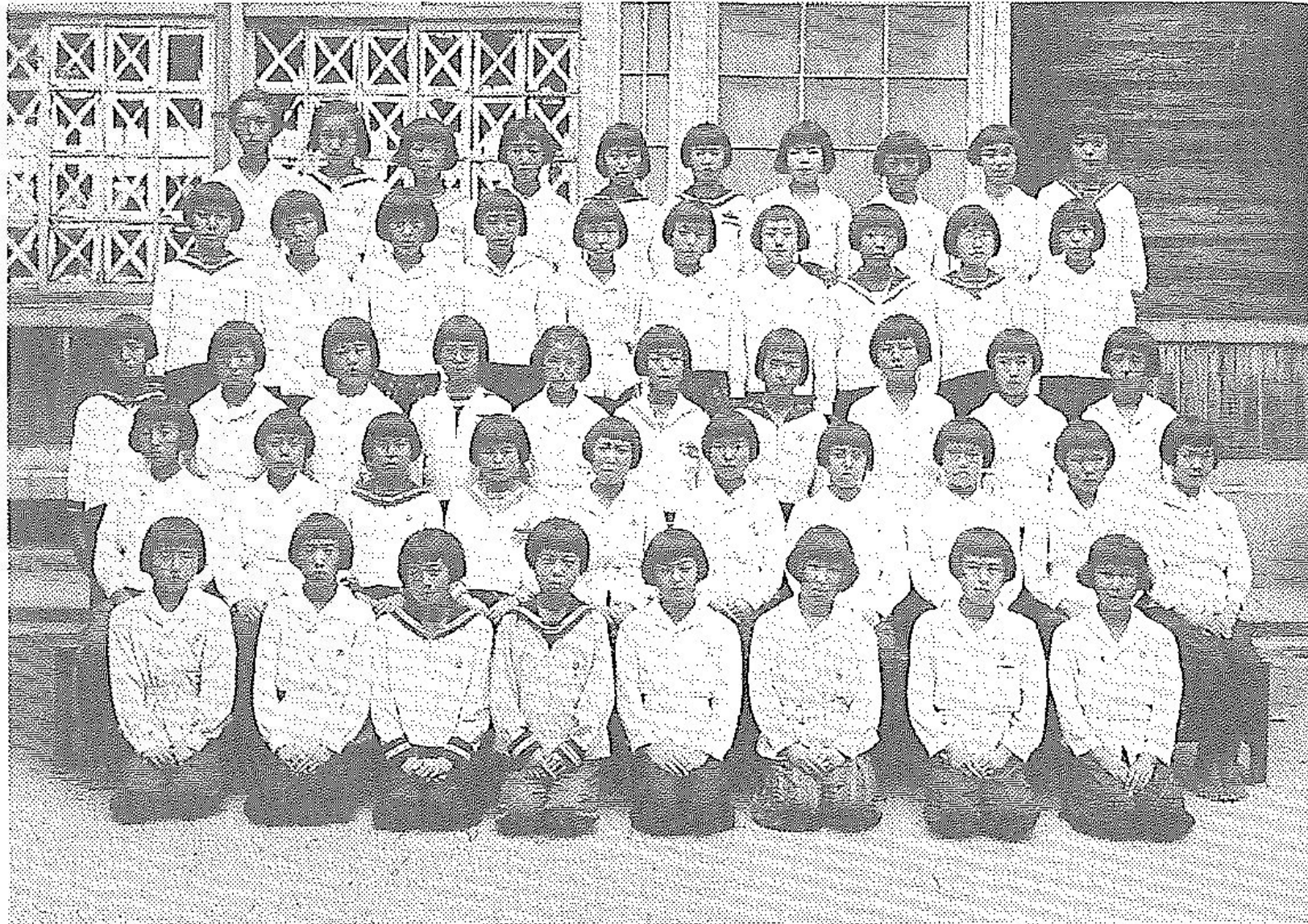
◇広島での建物疎開(空襲に備えての空地増設)学童の悲劇

* 作業中に被爆、殺された学童は約6000人。

* 爆心地付近(現在の平和公園一帯)では、9校、約2,000名が全滅。戦争推進のための「総動員」の悲劇でもある。



「新大橋(爆心から約600m—長久)のあたりに行くと、全身火傷で水を求めうごめいている中学生、女学生。倒れたまま、『おじさん、水をちょうだい』とあちこちから呼びかける声。だれがだれやら、親兄弟が見ても見分けがつかないだろう。真っ黒に焼けた唇は、ぷうと大きくふくれあがり、顔が腫れ、目がつぶれ、わずかに開いているばかり。あたりにはシャベル、鍬、バケツ、救急袋、弁当箱などが散乱していた。何百という無数の死体だった。橋の上、橋の下にもごろごろと人が転がっている。巨大な瀬川倉庫は倒壊していて紅蓮(ぐれん—猛火の炎のたとえ)の炎があがっていた」(6日夕方。小川春蔵さん<当時33歳>の証言)



県立広島第二高等女学校（建物疎開作業に動員された学徒たち）24

仮繃帯所(ほうたいしょ)にて

峠三吉「原爆詩集」より



あなたたち
泣いても涙のでどころのない
わめいても言葉になる唇のない
もがこうにもつかむ手指の皮膚のない
あなたたち

血とあぶら汗と淋巴液とにまみれた四肢をばたつかせ
糸のように塞いだ眼をしろく光らせ
あおぶくれた腹にわずかに下着のゴム紐だけをとどめ
恥かしいところさえはじることをできなくさせられた
あなたたちが
ああみんなさきほどまでは愛らしい
女学生だったことを
たれがほんとうと思えよう

焼け爛れたヒロシマの
うす暗くゆらめく焰のなかから
あなたでなくなったあなたたちが
つぎつぎととび出し這い出し
この草地にたどりついて
ちりちりのラカン頭を苦悶の埃に埋める

何故こんな目に遭わねばならぬのか
なぜこんなめにあわねばならぬのか
何の為に
なんのために
そしてあなたたちは
すでに自分がどんなすがたで
にんげんから遠いものにされはてて
しまっているかを知らない

ただ思っている
あなたたちはおもっている
今朝がたまでの父を母を弟を妹を
(いま逢ったってたれがあなたとしりえ
よう)
そして眠り起きごはんをたべた家のこ
とを(一瞬に垣根の花はちぎれいまは
灰のわからない)

おもっているおもっている
つぎつぎと動かなくなる同類のあいだ
にはさまって
おもっている
かつて娘だった
にんげんのむすめだった日を

そこに、「1人ひとりの死」「人間らしい死」はあったのか。

◇「当日死者」のうち、家族に看取られながら死ぬことができた人は、わずか4%といわれている。

◇原爆は、「その死を確認するすべもない死」を強いた。遺族は、肉親の最期のときをさまざまに想像して苦しみ続けている。



平和公園内にある原爆供養塔。推定で7万人以上の遺骨がここに納められている。

死体処理にかんする証言(別紙資料)



川に浮かんだ死体を引っ張り上げて、俵積みにして焼いていた。
体は燃えるが、頭は燃え残りころころと落ちてくる。
それをスコップですくっては、火の中へ放り込んでいた。

——牧野俊介



8月8日。市内の道路という道路で、
兵隊が死体を引きずって並べていた。
街中、死臭が漂っていた。

——田邊俊三郎

きのこ雲の下で

1人ひとりの人間は...



人間を押しつぶす圧倒的(悪魔的)な力。

その後も、放射能によって殺され続けた人びと。

核兵器は、現在、人類を絶滅できる唯一の兵器。

被爆の実相普及こそ、核廃絶への最大の力。

広島の実相を学ぶために読んだ文献

『原爆災害 ヒロシマ・ナガサキ』

(広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編、岩波現代文庫、2005年)

『原爆の子ー広島の子少年少女のうたったえ上・下』(長田新編、岩波文庫、1990年)

『ヒロシマー壁に残された伝言』(井上恭介、集英社新書、2003年)

『ヒロシマ・ナガサキ 二重被爆』(山口彊、朝日文庫、2009年)

『広島第二県女二年西組』(関千枝子、ちくま文庫、1988年)

『ヒロシマ、遺された九冊の日記帳』(大野允子、ポプラ社、2005年)

『いしぶみー広島二中一年生全滅の記録』(広島テレビ放送編、ポプラ社、1970年)

『爆心地中島ーあの日、あのとき』

(元大正屋呉服店を保存する会・原爆遺跡保存運動懇談会編、2005年)

『いのちの塔ー広島赤十字・原爆病院への証言』

(「手記集」編纂委員会編、中国新聞社、1992年)

『原爆に夫を奪われてー広島農夫たちの証言』

(神田三亀男編、岩波新書、1982年)

『きのこ雲の下から、明日へ』(斉藤とも子、ゆいぽおと、2005年)

『原爆写真 ノーモア ヒロシマ・ナガサキ』

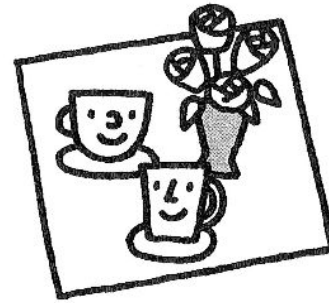
(黒古一夫・清水博義編、日本図書センター、2005年)

『あの日... 「ヒロシマ・ナガサキ 死と生の証言」より』

(日本原水爆被害者団体協議会編、新日本出版社、1995年)

『原爆の絵ーヒロシマの記憶』(NHK広島放送局編、NHK出版、2003年)

次回(2/27)テーマ



「8月9日 ナガサキ 被爆の実相」

